



Title	近代日本における中流家庭のインテリア：床の間飾りとインテリア手芸を例に
Author(s)	神野, 由紀
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 72-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100280
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代日本における中流家庭のインテリア 床の間飾りとインテリア手芸を例に

神野 由紀 関東学院大学

はじめに

デザイン史研究の問題を日常生活の行為にまで広げて捉える時、普通の人が住まいを装飾しようとする行為も重要な研究対象である。中流家庭において、住まいのインテリアを自らの趣味で考え、限られた予算の中で選択しなければならず、何をどう飾るのかという、本人の趣味が問われることになる。一般市民の住宅での装飾行為がテーマにならなかったのは、モダニズムの思考の中で「飾る」ことは常に否定的に捉えられてきたことも一因であるといえるだろう。本発表ではこの数年の発表者のインテリアに関する研究（神野，2018，2023）をふまえ、特に明治から昭和戦前期の日本の中流家庭のインテリアに焦点をあて、指南書や主婦向け雑誌などから、ジェンダー的な特徴をふまえ、その特徴を明らかにした。

男性による室内装飾の時代

日本の在来和風住宅における室内装飾の中心は、接客空間であった。都市の中間層にとって、客間の装飾は家長である男性の趣味、社会的地位を示すための重要な指標であり、風流な趣味を体得し、床の間に飾る美術品への造詣を深めることは、男性社会において重要なことであった。文化資本を持たない新中間層が増える中、彼らの上昇志向を反映し、明治末頃から室内装飾の記事や指南書の出版が相次いだ。

白木屋の PR 誌『家庭の志る遍』には、明治 37（1904）年第 1 号から「室内装飾法」という松浦伯爵直伝の床の間装飾に関する記事が連載されて

いる。「床の間の掛物や飾りなどは、仕方により其の主人の雅俗、心の浅深も窺ひ知らるゝものであります」という松浦の言葉は、「雅俗」を持たない中間層が何を求めているかを示していた。

また、三井呉服店の百貨店化を進めた経営者・高橋義雄は、後に茶人として名を成し「趣味人」として知られるようになるが、彼もまた地方から上京し、書生から企業に入り、成功した典型的な中間層であった。明治 24 年、31 歳の時に三井銀行に入り、結婚して築地に新居を構えた際、借家を披露するために偽筆の掛け軸や縁日の万年青を使って室内調度を何とか工面しようとしている（高橋，1933）。

こうした中間層の欲望に着目した戦前の百貨店では、明治末頃から客間を飾る、買い求めやすい美術品や趣味の雑貨類が販売されている。「是真風」「不味風」と名付けられた「風流道具」「お座敷道具」が人気を集め PR 誌で紹介され、さらに頒布販売が盛んに企画された（神野，2015）。

明治末に刊行された杉本文太郎『日本住宅 室内装飾法』では、いかに良い趣味を室内装飾に反映させ、それによって客をもてなすかということに主眼が置かれている。趣味がよければ高価な装飾品でなくてもよい、という杉本の言葉は、本書が新しい中間層に向けられて書かれたことを示している（杉本，1910）。

明治から昭和戦前期の女性と室内装飾

昭和戦前期までのインテリアの主たる担い手は男性であり、自身の社会的地位を顕示するために

いかに接客空間をしつらえるかが重要であった。同時期に一般女性が婦人雑誌などで住まいについて発言するのは、美しく飾ることではなく、いかに自身が快適に家事育児をできるか、家族生活を近代化するためにはどうするか、どう機能的、衛生的に改良するか、といったことが多く、建築家や家政学者など専門家の意見を支持する読者の声が目立つ。「飾る」という意味での室内装飾については、客間が家父長の空間である以上、接客本位の家において女性が担える場所は限られていたといえる。

本研究では『主婦之友』（主婦之友社）の戦前期（1917.03-1945.08）の住宅・室内装飾に関する記事調査を行い、その結果3つの特徴を抽出した。

1つ目が改良住宅に関する記事である。同時代の住宅改良の機運の中で、橋口信助らによる経済的で機能的な住宅の紹介が目立つ。比較的低価格で、快適かつ合理的に暮らせる小住宅を持つことができる、という紹介記事が多い。この時代の女性たちは、建築家や家政学者らによる上からの意見をそのまま受け入れることからインテリアへの関与を始めていた。誌上では識者の意見を実践して建てた、当時としては数少ない事例が模範的なケースとして紹介されている。

2つ目が、床の間を飾るいけばなに関する記事である。各流派による女性のお稽古事が広まる中、同誌では流派のいけばなが頻繁に紹介されている『主婦之友』において、女性が床の間を飾る行為は、いけばな以外はほとんど出てこない。

3つ目が、インテリア手芸に関する記事である。初期には改良住宅記事と分量的に拮抗していたが、昭和3~4年頃以降は圧倒的に手芸記事が多くなっている。廃物を利用した手芸も含め、クッションカバーやテーブルクロス、電燈カバーなど、その多くは自邸を飾るための洋風なインテリア小物の作り方の紹介であった。同誌大正13年4月の「趣深い室内装飾の仕方」（内山茂樹）では、接客のための装飾ではなく、あくまで家族団らんの居場所

としての家庭づくりを推奨し、これを達成するために室内装飾は「快適・よき感じ・親しみ」を根本的な目標にすべきとし、それは決して華美なものである必要はなく、有り合わせの材料で、僅かの努力で簡単にできると述べている。まさしく同時代の住宅改良運動などに見られる家庭観を前面に出すことで、男性による接客のための顕示的な装飾が多い和風住宅を暗に批判し女性の家庭のための手作りのインテリアを称揚している。

おわりに

男性による室内装飾が日近代的として否定される一方で、女性たちは西洋近代住宅の思想に加担することで住まいへの関与を増やしていくことになる。しかし、推奨されているはずの女性の手芸における装飾はその後、戦後の大きなインテリア手芸ブームに発展したものの、その過剰な装飾は結果的に「悪趣味」として、モダンデザインからは排除されていく構図をつくりだした。こうした一般市民の「飾る」行為の意味について、新たな視点での考察が今後も必要であると思われる。

【参考文献】

- 神野由紀『百貨店で〈趣味〉を買う』吉川弘文館、2015
神野由紀「近代日本のデザインとジェンダー——手作りインテリアの意味をめぐる考察」『デザイン理論』第72号、2018、79-93
神野由紀「DIY インテリアをめぐる実践と趣味に関する考察」『デザイン理論』第83号、2023、1-14
杉村文太郎『日本住宅 室内装飾法』建築書院、1910
高橋義雄『箒のあと』秋豊園、1933

- * 本発表は科研費基盤（C）「日本における趣味の大衆化とインテリア実践に関する考察」による。
* 本発表の一部は『現代風俗学研究』第24号（2024年9月20日発行）に掲載されている。